

「新島八重子夫人より

安中教会の四女性宛の書状」

二期生 淡路博和

▼「一」はじめに

今年の六月に、NHKが平成二十五年の大河ドラマに、新島襄先生の夫人新島八重子さんの生涯を描く「八重の桜」を製作すると発表して以来、安中でも八重子夫人のことがしばしば話題になっております。

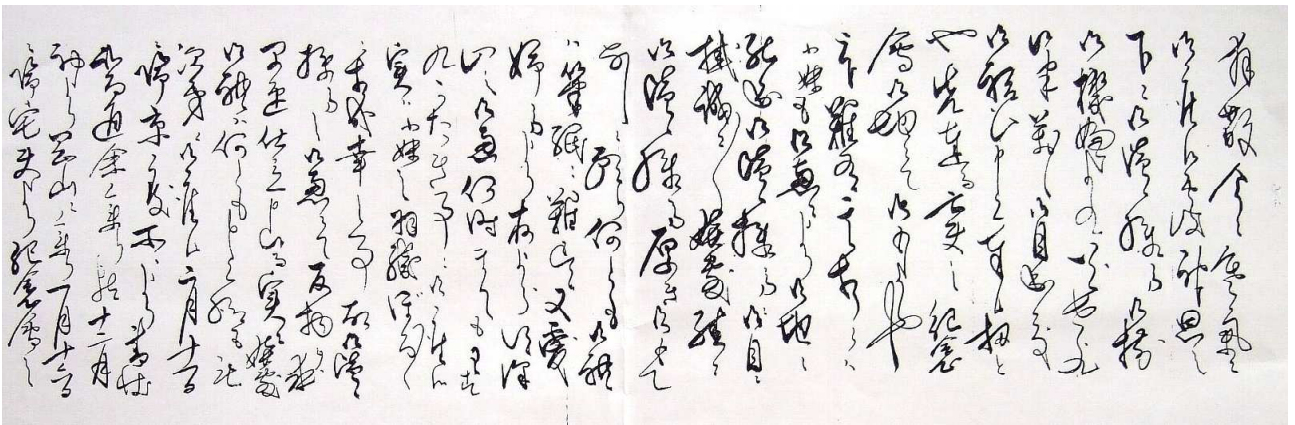
今回紹介致します標題の書状は、松井田町在住の十一期生小坂橋治徳君（私たち調査グループの仲間）が、かつて学園に寄贈されたものであります。

その時点で既に封筒はありませんでした。数人の手を経て、最後に小坂橋家に伝わったものと思われ、その間に封筒は失われてしまったのでしよう。それは年代考証という点から考えると残念なことですが、今となっては致し方のないことであります。

八重子夫人の話題が出るようになった折りでもあり、彼女の書状を紹介してみます。草書体で書かれているうえ、当時の文章独特の読み方がありますので、難読文字には読み仮名を付けました。

「二」書状の写真とその解説文

1



拝敬 今二寒氣二
御座候處、神恩之
下二御皆々様方御揃
御機嫌よくいらせられ
候半、萬々御目出度
御祝申上奉候。扱と
や先達而、亡夫之紀念
會御地二て御もよふし
被下難有、其折二ハ
小妹も御恵二より御地二
罷出、御皆々様方二御目二
掛、誠ニ々々嬉敷、殊ニ
御皆々様方厚き御もて
なし二預り、何とも御禮
ハ筆紙二難尽、又愛
姉方より存よらず澤
山之御恵、何時までもわす
れがたき事二御座候。
実ハ小妹之羽織ぼろぼろ
二相成、幸之事故御皆々
様方之御恵二て反物ヲ求、
早速仕立申候而、実ニ嬉敷、
御禮ハ何とも申上様も無
次第二御座候。二月十一日
二帰京致、所々より書状
式百通余参り居、十二月
初より岡山ニ参り、一月十六日
ニ帰宅、夫より紀年會之

為、非常ニ多忙、廿九日より
 御地方ニ参り、長々之間
 不在がちニ而種々成用
 事重居、段々と方付
 致居内、風邪ニかかり
 當一日ニよふ床ヲはな
 れ、二日より下女親病氣
 之為、国元ニ帰り、只今ハ下女
 無ニて、殊ニ五日より昨日迄
 毎日の降雪、寒氣も
 きび敷、萬事一人ニ而
 暮し居申候故、多用
 二而、存つづけ居ながら
 本日まで御皆々様ニ御申
 訳も無、御無沙汰ニ打過、
 廣き御ころもて御
 ゆるし被下度願上奉候。
 此度写真差上申候間、
 御笑納被下度、延引ながら
 御禮御皆々様厚く申上候。
 先ハあらあら申上奉る。
 可祝
 三月十四日
 新島八重 拝
 半田多可子様
 中村 梅子様
 根岸古う子様
 湯浅と美子様

▼「三」書状全文の意識

拝敬 今なお寒氣で御座いますが、神恩の
 と御皆々様方、御揃いで御機嫌よくいらせられ
 万々御目出たく御祝い申し上げます。

さて先達ては、亡き夫の紀年会を御地（安中）
 にて催しくだされ有難う御座いました。

その折には私も、お恵により御地に出向き、
 御皆々様方にお目にかかり、誠に誠に嬉しく、
 殊に御皆々様方の厚きおもてなしに預り、何と
 申してよいやら、御礼は筆紙には尽くしがたく、
 そのうえ愛姉方より思いもよらず、沢山の御恵
 みを戴き、いつまでも忘れがたいことで御座い
 ます。

実は私の羽織は、ぼろぼろになってしまい、
 幸いなことに御皆々様方の御恵みによつて反物
 を求め、早速仕立てました。実に嬉しく、御礼
 はなんとも申し上げようもない次第です。

私は二月十一日に帰京致し、所々より書状が
 二百通余も参つておりました。十二月初より岡
 山へ参り、一月十六日に帰宅し、それより紀年
 会のために非常に多忙でした。廿九日からは御
 地方（安中）へ参り、長い間不在がちでしたの
 で種々の用事が重なり、段々と片付けている中
 に、風邪にかかり、一日になって漸く床を離れ、
 二日より家政婦が親の病氣のため国元へ帰り、
 只今は家政婦なしに暮らしております。殊に五
 日より昨日まで毎日の降雪、寒氣も厳しく、万
 事一人で暮して居りますので、多用のため、思

いながらも、本日まで御皆々様には申し訳なく、御無沙汰に打ち過ぎてしまいました。どうぞ広き御心をもってお許しくださいますようお願い申し上げます。

この度は写真を差し上げましたので、御笑納ください。延引ながら御礼を御皆々様へ厚く申し上げます。先はあらあら申し上げ奉ります。

三月十四日

かしく

半田多可子様

新島八重
拝

中村 梅子様

根岸古う子様

湯浅と美子様

▼「四」登載人物 五人の略歴

イ、新島八重夫人

新島襄先生の奥方で、弘化二年十一月三日^{一八四五}

会津で生まれ、昭和七年六月十四日京都で^{一九三三}

永眠、八十六歳。新島八重子と記名する時もありますが、おそらく江戸時代は八重で、

明治になってから八重子と記名したと思われる。それは、宛名の四人の女性たちについても同様だろうと思います。

ロ、半田多可子様

原市の半田宇平次氏の長女、天保十四年十二月十四日生れ。明治十五年三月五日 村上俊吉牧師より受洗。原市赤心幼稚園初代園長。大正十三年八月十二日永眠 八十歳。

ハ、中村 梅子様

明治十五年三月五日村上俊吉牧師より受洗、元松井田町長小坂橋助四郎氏の姉で安中の中村源次郎氏妻。大正十年十月十四日永眠。

ニ、根岸古う子様

旧姓後藤で、安中藩剣術師範根岸松齡の三男である根岸橋三郎氏の妻、明治四十年三月十日 柏木義圓牧師より受洗。生年不詳

ホ、湯浅と美子様

明治十年七月二十九日、中野谷の佐俣家に生れ、明治二十九年に有田屋の湯浅三郎氏と結婚。明治三十一年十一月二十七日 アルブツト師より受洗。新島学園前理事長湯浅太郎氏の祖母、昭和三十八年七月廿日 永眠八六歳。

参考資料「安中教会受洗者名簿」

「湯浅とみ」など。

▼「五」書状の書かれた年月について

宛名に書かれている女性たちは、いずれも当時、安中キリスト教会の信徒や求道者たちです。ただ問題はこの書状が何時書かれたものなのか、ということ。

内容からみると、「亡夫之紀念會」（故新島先生の紀年会）が「御地」（安中）で催され、神のお恵みにより八重子夫人も「御地」にまかりこし皆様にお目にかかり、大変嬉しかったこと。またその節には「愛姉」（教会の婦人たち）から沢山のお恵みをいただき、帰京してから、それ

をもとに反物を買ひ、羽織を仕立てたことが記してあります。最後に写真をお送りしましたのでご笑納くださいと書かれております。

そうしますと、八重子女史が安中に来られたことは確かです。それが何年何月なのか。初めは明治二十四年と考えていましたが、湯浅登美子氏が明治二十九年に結婚して湯浅姓になったことを考えると、明治二十四年ではありません。

▼新島八重子夫人は、私のささやかな調査では、安中に左のように四回来られております。

（夢故園花」第二号参照）

- | | |
|------|----------|
| 第一回目 | 明治 十五年七月 |
| 第二回目 | 明治二十一年八月 |
| 第三回目 | 明治四十三年一月 |
| 第四回目 | 大正 十 年八月 |

明治二十一年でなければ、第三回目のご来安の明治四十三年であろうかと思われます。それに四人の女性の年齢等から考えてみても、明治四十三年のことではないかと思われるのです。ただ、今後の研究・調査が進めば、訂正される可能性もあります。この点をお含みおき願います。また書状の末尾に、「写真を差し上げました」とありますが、これがどんな写真であったのか、今後の調査に期待したいと思います。

以上

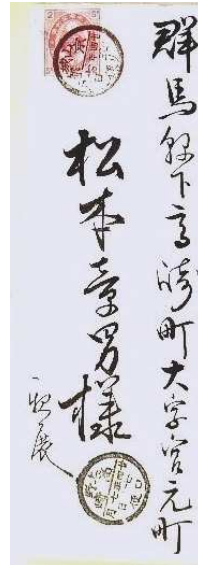
【史料紹介 二】 高崎市 田島桂男氏所蔵

「新島八重子夫人より

高崎の松本章男氏宛書状」

▼「二」封筒

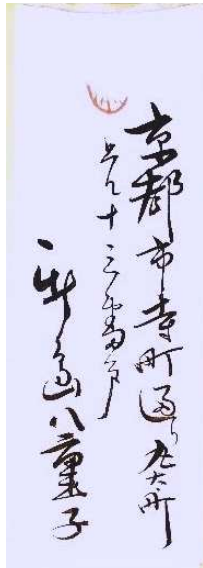
イ、宛名



群馬縣下高崎町大字宮元町
印 松本章男様 印
切手 親展

切手消印 明治二十四年七月七日
(新島先生永眠の翌年)

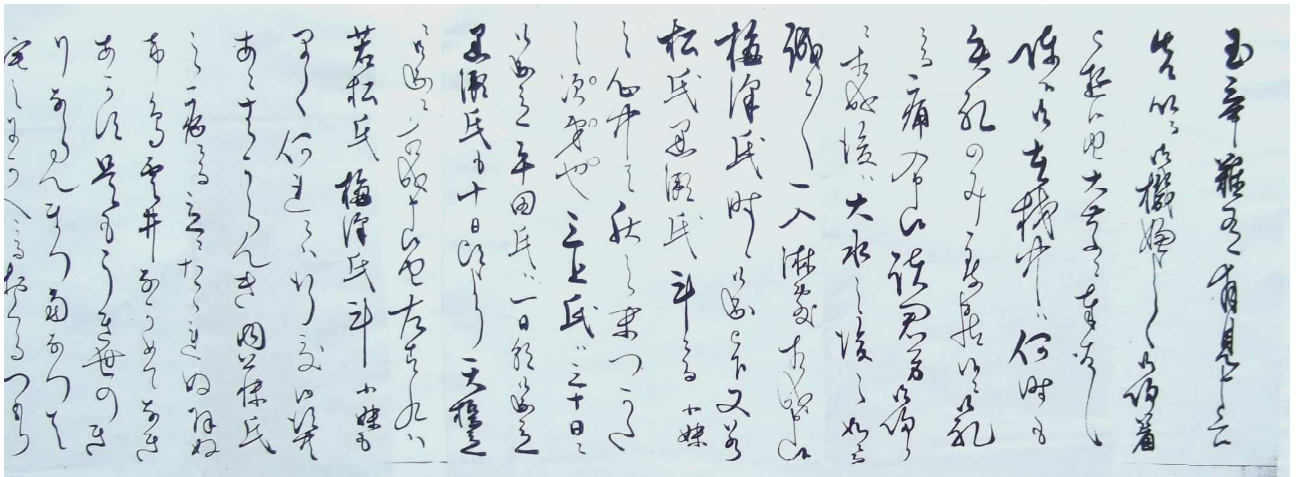
口、差出人



京都市寺町通り丸太町
上ル十三番戸
新島八重子

▼「二」書状の写真とその解説文

1



▼上の書状の解説文 (改行は写真と同じ)

玉章様へ、有見と云
先以て御機嫌よく御帰着
被遊候由、大慶二奉存候。
陳ハ御在校中ハ何時も
失礼のみ致し居候二御礼
ニ而痛入申候。諸君方御帰り
ニ相成後ハ、大水之後之如ニ而
誠ニ誠ニ入淋敷相成申候。
梅澤氏時々御出被下、又若
松氏、黒瀬氏計ニ而小妹
之心中者秋之末つかた
之次第也。三上氏ハ三十日ニ
も御出立、平田氏ハ一朝御出立
黒瀬氏も十日頃より天橋立
ニ御出ニ相成申候由、左すれハ
若松氏、梅澤氏計、小妹も
早く何れニハ行度候得共
あにはからんき、内藤氏
之病ニ而、立二たたれぬ羽ぬ
け鳥、雲井なかめてなき
あかす、是もうき世のき
りならん、まつ當なつは
宅之にかへニ而おくるつもり

▼上の書状の解説文

二御座候。是二引替、諸君方ハ嘸々おもしろく日々御暮し被遊候^{あそはされそうらん}半と、実二御うら山敷^{やましくぞんじ}そんじ上^{あげたてまつり}奉候。先達而写真ハ皆々様誠二よく出来申候。深井兄之、おらさるハ実二いかん千萬、右写真ハ三上兄ニ託し置申候間、同兄貴地ニ御出之折ニ御持参二相成^{あいなりもうすべく}可申候。小妹之居間ニ掛置申候間、諸君方二ハ日夜拝顔致^{いたしおりそうらえども}居候得共、物言スハ写真、両三年之内ニハ皆々様方ニ御目ニ懸^{かかりたき}度ものニ御座候。其内ニハ、おしげさん^どもとな様ニか出来候^{そうらんわん}半と相願申候。當夏ハ諸君方ハ何れニ而御休被遊候哉^{いづれにみあてはされそうらんや}、実二実二御うらやま敷御座候。先ハ御安着之御よろこひ^喜まて申上奉候。あらあら

不一

(この続きは下段の右へ)

七月五日

新島八重子

松本章男大兄

玉下

尚々時下御いとへ被遊候様^{はばかりさまながら}、御皆々様ニよろしく仰上^{おうえあげ}被下^{くだされ}度候間、大兄よりよろしく御伝言被下^{くだされ}度願上奉候。かしく

▼「二三」書状全文の意識

玉章^{たまづさ}（御手紙）を有り難く拝見いたしました。先ずは御機嫌よく御帰着遊ばされた由、大慶に存じあげます。陳は御在校中はいつも失礼のみ致しましたのに、御礼の御挨拶にて痛み入りました。

諸君が帰省された後は、あたかも大水が引いた後のように静かになり、誠に一入の淋しさを感じております。

梅澤氏は時々御出くださいますが、若松氏や黒瀬氏ばかりにて私の心の中は、秋の末つかたの様な次第ですよ。三上氏は三十日に御出立、平田氏は一日朝に御出立、黒瀬氏も十日頃より天の橋立に行かれる由で御座いますから、そうすれば、ここは若松氏と梅澤氏だけになつてしまいます。私も早くどこかに行きたいと思ひますけれども、あにはからんや、内藤氏の病にて、立つに立たれぬ羽抜け鳥、雲井眺めて泣きあかす、是も浮き世の義理でしょうか。

先ず今年の夏は拙宅の二階でおくるつもりで御座います。是に引き替え、諸君はさぞさぞ面白く日々をお暮らし遊ばされるのだろうと、実に羨ましく思っております。

先達ての写真は皆々様誠によく写っておりますね。その中に深井兄のいないのは、実にいかん千万。この写真は三上兄に託して置きましたから、同兄が御地（群馬）にお出での折には御持参なさるに違いありません。私も写真を居間に掛けておりますので、日夜諸君の顔を拝しておりけれども、ものを言わないのが写真、両三年の内には皆々様に御目に懸かりたいもので御座います。その内には、おしげさんにもよい方が出来るだろうと願っています。

この夏は、諸君は何処にて御休み遊ばされる

のやら、実に実に御羨ましく御座います。先は御安着の御喜びまで、あらあら申し上げました。

七月五日

不

松本章男大兄

新島八重子

玉下

尚々 時下御厭い遊ばされますように、憚り様ながら、御皆々様によりしくお伝えください。深井兄には、書状はこの度は差し上げませんので。大兄よりよろしく御伝言くださいますようお願い申し上げます。 かしこ

（註・深井兄とは第13代日銀総裁深井英五氏）

▼「四」書状中の人物について

イ、新島八重子氏

新島 襄先生の奥方です。安中との関係については、「夢故園花」第二号をご参照ください。

ロ、松本章男氏と二枚の写真

この書簡の所蔵者であります田島桂男氏のお話によりますと、松本章男氏は明治三二年二月に西群馬郡高崎宿（現高崎市）の士族松本知常氏の長男としてお生まれになり、高崎の小学校高等科を卒業後、同志社英学校に入学。田島氏所蔵の記録によると、明治二十四年六月二十五日挙行の第十六回卒業式で、同志社普通科を二十歳で卒業しております。この時の卒業生四十七名の中には、群馬県出身者として深井英五・井上恵之助・小板橋京三郎・久保庭幸次郎

・三上真吉・中島與三郎・横山一作の七氏が載っております。市町村名は載っておりません。その後、章男氏は台湾に渡り、台湾総督府に勤務、明治三十八、九年頃にマラリアに感染し、独身のまま三十五歳位で亡くなられたとのことです。お墓は高崎の恵徳寺にあります。

田島桂男氏は、章男氏が官服に立派な帽子を被り、正装した写真を見たことがあり、その服装がかつて物置にあつたとのことですが、今はありません。章男氏と田島家の祖徳之助氏は義理の兄弟であつたことから、章男氏の僅かな遺品が田島家に残されたものと思われま

す。▼また次のような二枚の写真が残されておりますが、私はこの二枚の写真こそ、先ほどの書状の中で新島八重子夫人が「三上氏に託した」と述べられている写真に間違いないと思っております。まず一枚目の写真は、左の八重子夫人お一人の写真です。



二枚目の写真が次の写真です。

す。なお写真の裏には、八重子夫人の手で次のように墨書されています。裏書きは二枚の写真とも同文です。

▼裏書き。日付は明治二十四年^{「八九」}六月とあり、八重子夫人が章男氏に書状を認めた一か月前のことです。おそらく夏休みに入る前に撮った記念写真であることは、書状の内容でわかります。

明治二十四年六月
松本章男様
新島八重子

明治二十四年^{「八九」}といえば、新島先生が神奈川の大磯で亡くなられた翌年にあたります。永眠一周年のご法事を済ませた八重子夫人は、なお一層の淋しさの中にあつて、学生達のことを思いやつたのではないのでしょうか。

▼故松本章男氏^{あやお}については、田島家にも僅かな伝承しかなく、余りに不明な点が多すぎるのですが、この二枚の写真と八重子夫人の書状だけは、間違いなく章男氏の存在証明として、今日にまで伝えられて来た貴重なものであります。

異郷の台湾で、若くして亡くなられた章男氏は、おそらく望郷の思いにかられながら、無念の涙を流されたことと思います。しかしながら同志社に学び、新島先生ご夫妻を知り、聖書と信仰を学んだ章男氏です。ほんの万分の一にも足りませんが、ここにご紹介することができ、良かったなと思っております。

田島桂男氏には色々のご教示をいただき、厚く御礼を申し上げます。

以上



新島学園収蔵史料調査整理
ボランティアメンバー

淡路 博和	2 期
白石 幸晴	9 期
小坂橋 治徳	11 期
清水 博	11 期
真下 正雄	15 期

二〇二一年一〇月十三日(木)

調査整理開始以来
ほぼ週一回宛調査

この拙文につき疑問や補正がありましたら、左にメールをいただけましたら幸いです。

awaji@sep.email.ne.jp

夢故園花 学園収蔵史料紹介誌
第三号 (非売品)

発行日 二〇二一年一〇月二二日

編集 秋池 いづみ

新島学園教諭

発行 淡路 博和
印刷 新島 学園

向かって一番右の椅子に座しておられるのが新島八重子夫人です。他の五人の学生については、誰が誰やらわかりません。しかしこの中に、松本章男氏^{あやお}がおられることは確かです。前述の八重子夫人の書状に名前が載っている学生達の可能性が大了。撮影は京都寺町高辻の堀真澄写真館です。同志社大学の本井康博教授も初見とのことですので、お名前のお解りの方がおられましたら、教えていただければ幸いです。